



目次

1 学科制の新たな文学部へ	1
2024年度新任教員の紹介	2
文学部附属国際マンガ学教育研究センター	2
最終9期生を迎えるグローバルリーダーコース(GLC)	2
文学部～この1年～	3～6
総合人間学科/歴史学科	
文学科/コミュニケーション情報学科	
2024年度の教務委員会について	7
2024年度の学生支援委員会の活動について	7
2024年度オープンキャンパス報告	7
留学体験記	7
インターンシップに参加して	7
漱石八雲教育研究センター活動報告	8
永青文庫研究センター活動報告	8
2024年度熊本大学文学会活動報告	8

1 学科制の新たな文学部へ

文学部長 伊藤 正彦

熊本大学は、「情報融合学環」につづき、令和8(2026)年4月から文理融合の学部相当組織である「共創学環」(仮称、学生定員80名)を創設します。「共創学環」は社会課題を解決する実践力を具えた人材の育成を目標としており、そのコースの一つ「グローバルイノベーションコース」は文学部のコミュニケーション情報学科、グローバルリーダーコースの教育内容を発展的に継承するものです。

「共創学環」の創設とあわせて、令和8(2026)年4月から熊本大学文学部は従来の4学科制を改めて「人文科学科」(仮称、学生定員160名)の1学科制とします。1学科制になると従来の4学科制のもとの学問が学べなくなるのではないかと心配される方がいるかもしれませんが、そうしたことはありません。文学部からなくなるのは、コミュニケーション情報学科のコミュニケーション情報学コースのみです。上記のように、「共創学環」の「グローバルイノベーションコース」がコミュニケーション情報学コースとグローバルリーダーコースの教育内容を継承しますので、コミュニケーション情報学コースやグローバルリーダーコースを目指されていた方には、「共創学環」の「グローバルイノベーションコース」を志願していただきたいと思えます。

コミュニケーション情報学コース以外の9コース・21の履修モデルは、「人文科学科」1学科制のもとでも継続されます。昨年この場(『文学部通信』第23号)で、学部の

低年次から各学問分野の基礎・技法を学習して確かな専門性を修得することが熊本大学文学部の大きな特色であり、近年では各学問分野に関係する専門職に多くの方が就職する実績をあげていることを述べましたが、そうした教育環境を1学科制のもとでも継承・発展させていきたいと思っています。また、1学科制には、志願時点で所属学科を決めることなく、1年次に文学部を構成する学問分野の科目を広く学んだうえで希望のコース・履修モデルを選択できること、従来は不可能であった複数の教科の教職免許を取得することが可能になるといったメリットがあります。



なお、令和7(2025)年度の入学生までは、従来の4学科制のシステムによって卒業まで教育していきます。

文学部をめぐる新しい動きを紹介しました。新たな体制のもとでも熊本大学文学部が誇る特色と実績を発展させるよう努めますので、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

2024年4月には人文社会科学研究部(文学系)に全学の学芸員課程教育担当の新里亮人准教授が着任されました。ご専門は南島考古学です。新里准教授は文学部の教育は担当されませんが、学芸員資格を希望する多くの学生がお世話になっています。

新任教員一覧

所属(学科・コース/研究センター)	専門分野	氏名
大学院人文社会科学研究部(文学系)歴史学分野	考古学	新里 亮人

2024年度新任教員の紹介

新里 亮人 大学院人文社会科学部(文学系) 歴史学分野

2024年4月に着任した新里亮人です。主に学芸員養成課程の科目を担当しています。出身は沖縄県で、熊本大学文学部にて考古学を学びました。研究では琉球列島全域を対象としていて、最近南の島々に住んでいた人々がいつ頃から農業を始めたのか、また、その技術はどこから伝わったのかをテーマに調査を進めています。本学大学院を修了後、鹿児島県徳之島の自治体で博物館学芸員を勤め、2019年4月から昨年度末までは南キャンパスにある熊本大学埋蔵文化財調査センターに所属していました。これまで20年ほど文化財保護の現場に立ち、考古学だけでなく歴史学、民俗学、地理学、建築学、動物学、植物学、環境学など様々な分野の専門家とともに仕事をしてきました。将来、学芸員あるいは文化財の専門家として働くことを希望する皆さんにこれまでの経験を伝え、博物館や美術館の未来について一緒に考えていければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



文学部附属国際マンガ学教育研究センター

開設3年目を迎えた文学部附属国際マンガ学教育研究センターは、本年度も多くの企画を主催・参加しました。

熊本市五福公民館との共同企画として5月から連続セミナー「熊本大学マンガ学講座-熊本のマンガ研究者たち」を4回開催しました。毎回異なる熊本ゆかりのゲストを招いた、地域密着型のセミナーです。

○第1回(5/25) 五福校区の貸本屋跡や閉店する長崎次郎書店をめぐる街歩きツアーと、マンガ・映画研究者の藤川治水についての講義。

○第2回(6/29)「熊本とマンガコレクター」登壇・橋本博(合志マンガミュージアム館長)、梶尾真治(SF作家)

○(第3回は台風のため中止) 第4回(9/28)「熊本と表現規制をめぐる攻防戦」登壇・藤末健三(慶応義塾大学特任教授・元参議院議員)、稀見理都(マンガ研究者)、ダーティ・松本(マンガ家)

○第5回(10/26)「熊本大学とマンガ研究の展望」登壇・橋本博(キララ文庫元店主)、吉村和真(京都精華大学専務理事)、岩下朋世(相模女子大教授)

そのほか、11月16・17日に開催された小泉八雲没後120年記念事業「現在(いま)に生きるハーン」で、中高校生

国際マンガ学教育研究センター兼務教員 池川 佳宏

を対象とした「小泉八雲の名作を漫画で描く作品募集」の企画と作品選考を担当し、表彰式で池川佳宏准教授が講評を述べました。

また、11月21日には鈴木寛之准教授が韓国の順天大学の「海外研究所誘致及び共同研究」事業に招かれ特別講義を行い、翌22



▲熊本ゆかりの研究者のセミナー登壇

日には大田市の「2024 Webtoon発展セミナー」にて講演し国際交流を深めました。そして、初春に当センターの紀要論文集『視覚批評』創刊号を発刊しました。

そのほか、文化庁事業のマンガ刊本アーカイブセンターや日本マンガ学会事務局も当センター内で運営しており、全国的なマンガ研究拠点として大きく認知されています。



▲『視覚批評』創刊号

最終9期生を迎えるグローバルリーダーコース(GLC)

文学部グローバルリーダーコース(GLC)は、学生受け入れを開始してから2024(令和6)年で8年目となり、2025(令和7)年4月には本コース最後の新生として9期生を迎えます。コロナ禍を乗り越えた昨年度に続き、今年度の文学部GLC生も様々な活動に活発に取り組んでいます。

海外留学については、GLC各期の学生たちが、昨年度のボルドー・モンテーニュ大学(フランス)等に続き、ワルシャワ大学(ポーランド)やシドニー工科大学(オーストラリア)へと旅立っています。海外短期留学プログラムや海外インターンシップも実施され、文学部GLC生も参加しました。

この一年、4年生となった5期生は、卒業後の進路に向けての活動や卒業論文執筆に真摯に取り組んできました。3年生に進級した6期生や2年生となった7期生は、引き続きGLCでの研修やセミナー、フィールドワークを含めたプログラムへの精力的な参加を通して学びを深めています。2024年4月に入学した8期生10名は、5月25日(土)～26日(日)の2日間、GLC1年生を対象として実施された

文学部GLC教務専門委員 新井 英永

天草研修に全員参加しました。そして、2025年4月に最終9期生10名を迎えるための入学前セミナーも順調に進んでいます。

熊本大学は2026(令和8)年4月に、新学部組織「共創学環(仮称)」の設置を予定しています。これに伴い、2017(平成29)年度に1期生が入学したグローバルリーダーコースは、2025年度で学生受け入れの幕を閉じ、翌年度からは本コースの趣旨を取り入れて「共創学環」に設けられる新たなコースに引き継がれることとなります。2025年度入学の9期生やそれ以前に入学したグローバルリーダーコース所属のすべての学生が、翼を広げこの黒髪キャンパスから羽ばたくまで、これまで通りご支援くださいますようお願い申し上げます。



▲入学前セミナー参加の文学部9期生

総合人間学科

■哲学

松浦 奉希さん(3年)



交換留学でドイツのボン大学に行った際、印象的だったことが一つある。それは「言語哲学」の授業のこと。語学力に全く自信がなかった私に対して、Stefano先生は「君は英語を学びに来たわけではないだろう。哲学をしに来たのではないのか」と発破をかけられた。授業中、学生達は自発的に質問を投げ、忌憚なく意見し、議論していた。悔しくも私は力及ばず、授業についていくことはできなかったが、それでもボン大学留学では多くを学び、先生に言われた「哲学する」を味わってきた。

哲学履修モデルのゼミでは、大辻先生のご指導のもと、フレーゲやネーゲルといった哲学者の著作を原文で読み進めていく。参加者は担当箇所の要約と疑問点をレジュメにまとめ、それに基づいて議論を交わす。また、哲学研究室では「哲学カフェ」を開催しており、学年や教員/学生の壁を越えて意見をぶつけ合う。こういった活動を通して得られる気づきは多く、多角的に刺激を受けている。本履修モデルには、哲学を学び、哲学する環境がある。当然、これまでの哲学者に学ぶこと、対話と議論を重ねていくことはどちらも大切だ。そのため、今後この両輪で思考をさらに深めていけるよう励みたいと思う。

■心理学

松尾 王斗さん(3年)



皆さんは心霊写真を見たことがあるでしょうか？トンネルの内部や壁などに顔が映り込んでいる写真があると“いわくつきだ！”と騒いでしまうかもしれません。しかし、これらの心霊現象の多くは、特徴的な本来の視覚刺激を誤って解釈・見間違えてしまうパレイドリヤという現象によって説明できると言われています。このように私たちの身の回りがある事象の謎を解き明かすことができるのが心理学という学問の非常に面白い部分です。

心理学とは、人間の行動を支える「こころ」の仕組みについて解明する学問です。心理学履修モデルでは、主に実験と論文講読を中心に進んでいきます。実験は、実際に学生が被験者となり得られたデータを基に分析を行い、心理的事象の解明を行います。論文講読は、数人の班に分かれて論文の精読を行い資料にまとめて発表します。これらの講義を通して、自分が作成する卒業論文の内容を決めていきます。寺本先生、安村先生、研究室の様々な方が優しく指導してくださるため、分からない箇所を放置することなく研究に没頭することができます。また公認心理師資格のための講義もあり、臨床の現場で使われている診断方法や心理的なアプローチの方法を学ぶことができます。

今後は、心理学研究室の皆と助け合って卒業論文の研究に励んでいきたいと考えています。

■倫理学

今村 成那さん(3年)



倫理学とは、人間の規範となる物事の道徳的な評価、すなわち善と悪について検討する学問です。倫理学履修モデルでは、規範倫理学、メタ倫理学、応用倫理学等の分野について学ぶことができます。

私が所属するゼミでは、各自が興味のある分野の文献や資料を読んで要約、発表し、メンバー全員でその内容についてのディスカッションを行います。ゼミ内で扱われるテーマは多岐にわたり、流行りのAIに関する倫理や、生命倫理、メタ倫理学などが扱われました。ディスカッションを通すことで、自分の興味

とは異なる分野の書籍から意見を取り入れ、自分の研究したい分野にどのように活用できるかを考えたり、研究をする上で極めて重要な場となっています。また、このディスカッションには、ゼミを主催する教授も参加して下さっているので、発表の形式がアカデミーに適した形になるよう修正の指示もいただけます。

ゼミの雰囲気は極めて良好で、ディスカッションも和やかな空気の中で進行しています。懇親会などもあり、上級生との交流も積極的に行われています。また、学業のことについてだけでなく、就職のことについても話し合う機会があり、今後の展望を考える上でとても参考になりました。わずか半年と少しの所属期間ながら、とても居心地の良いゼミだと思います。

■社会学

富阪 直人さん(3年)



「社会学とはどんな学問なのか」という問いはとても難しく、私も上手く答えられる自信がありません。一言言えることすれば、私たちが生きるこの社会で「当たり前」とされていることを問い直す学問だということです。

「男性は外に出て働き、女性は家事や育児をする」という考えは日本の伝統的なものだと思っている人もいるかもしれませんが、社会学ではむしろそういった家族の在り方は近代に発生したものだと言われています。こうした「当たり前」とされているものを一旦立ち止まって考えてみることに社会学の面白さがあると思います。

私のゼミでは、卒業論文の構想やその参考文献を発表し、それについてお互いに質問や意見を交わしあっています。先輩後輩であっても遠慮なく発言しあうので、とても建設的な議論になっていると思います。また、トルコの大学生の方との交流もあり、刺激的な体験をする機会にも恵まれています。人数が多く、飲み会などのイベントもたくさんあるのでとても楽しい雰囲気のゼミです。

■文化人類学

隈元 祐羽さん(4年)



文化人類学とは、文献調査やフィールドワークを通して文化の多様性を研究することで自文化を捉え直し、新しい視点を見出そうとする学問です。自身にとっては日常の何気ない出来事も、他文化には存在しないことがあり、それに気づくことで多様性への理解を深めることができます。文化人類学の魅力の一つは、何気ない日常から人間全般について考えられることだと思っています。

私の所属するゼミは多国籍・多人種・多言語な環境です。ゼミには課題読書を行い文化人類学の基本的な考えを学ぶ「演習」の時間と、各人が興味のあるテーマについて自由に研究する「応用演習」の2つが設けられており、先生も含めたメンバーでの議論によって学びを深めています。日本と海外のファッションの比較や部活動、酒がコミュニティに与える影響などについて研究しているメンバーがいて、研究対象はあらゆる文化、社会に及びます。私は、総合人間学科は「なんでも学科」だと思っているのですが、その中でも特に「なんでも」なのが文化人類学ゼミだと個人的には思っています。

■地域社会学

床次 伶太さん(3年)



地域社会学とは、地域が抱えている様々な課題について取り組む学問です。農村環境問題や過疎問題だけでなく、地域コミュニティや福祉までも地域社会学で扱う内容になります。論文を読むだけでなく、フィール

ドワークを通して実際に現地の人の話を聞くことで、学びが深まり、視野が広がったと実感できることが地域社会学の魅力の1つです。

今年の3年生は社会調査実習にて、山口県下関市豊北町で質問紙調査と聞き取り調査を行いました。地域での暮らしや、豊北町で行われている有償ボランティアについて調査を行い、現在、調査報告書にまとめているところです。ゼミでは、論文などを輪読し、そこから浮かんだ疑問点や論点について意見を出し合います。このディスカッションを通して、多くの知識やあらゆる視点から物事を考える力などを身に付けることができます。

ゼミはとても温かい雰囲気でも、忘年会を開催するなど、距離感が近いところが特徴的です。担当教員の牧野先生、吉武先生はとても優しく、豊富な知識で指導して下さいます。地域社会学ゼミは、楽しく学び、人間としても成長できる場所です。

■民俗学

東 祐太郎さん(4年)



民俗学とは、自分自身を含め人々の日常生活に根差した習慣や価値観を、フィールドワークを中心に研究する学問です。実際に現地に赴き、話者の生きた言葉聞き取り考察する経験は自分の日常を見つめなおす「内省」に繋がっていきます。

現在私は熊本大学近くの子飼商店街をフィールドに卒業論文を作成しています。現地の従業員の語り聞き取り調査のほか、店舗空間で展開される店主の咄嗟の対応や、お店のお孫さんとお客さんとの関わりなどを参与観察で一つ一つ記録しています。これらの調査をもとに従業員の人柄や感覚、感性と商売のつながりを導き出そうと考えています。

ゼミでは先生や同じ4年生のゼミ生だけでなく、院生の先輩からも研究のアドバイスを頂けました。自分が何をテーマにどんなことを明らかにしたいのか、自らの着眼点や思いを、先生や学生のみならずと具体化していく取り組みはとても有意義な時間です。先行研究から題目の言葉遣いまで学問の作法や自分のメッセージを的確に伝える技術も先生が丁寧に教えて下さいました。

学生生活も残り少すです。微力ながらゼミや調査で積み上げたものを糧に、商店街の将来に役立ててもらえるような卒業論文に仕上げたいです。

■地理学

河村 花菜子さん(3年)



地理学とは、自然と人々の生活の関係を明らかにする学問です。地域で起こる様々な現象や出来事に対して、「なぜ」という疑問に留まらず、「なぜその場所で起こるのか」ということについて考えます。地理学の扱う分野

野は幅広く、先輩方も卒業論文において、防災・女性起業家・農業・流通・都市開発など様々なテーマで取り組まれています。また、その研究方法も、インタビュー、アンケート、資料やデータの分析など多様であり、あらゆる視点で地域を研究することができます。

地理学研究室の魅力は、自身の興味のあることについて、研究内容・方法を自由に決められることができ、担当教員である鹿嶋先生と米島先生からの丁寧な指導を受けられることだと思います。この1年間、授業ではGIS(地理情報システム)の使い方や統計の手法など、調査に必要な技術を学びました。また、地理調査実習では、計画から現地での調査までを経験し、地理学の考え方について理解を深めることができました。

研究室では楽しい雰囲気の中、互いに助言をしながら自身の研究を進めています。今後は先生方のご指導を賜りながら、個性豊かなメンバーとともに楽しく地理学を学んでいきたいと思っています。

歴史学科

■日本史学

4月、新2年生15名、新入院生3名を迎えて、総勢50名で、2024年度のスタートを切りました。その後、5月にかけて、ブレ新歓コンパ・新歓コンパ・新歓遠足と行事を重ねて、徐々に2年生との距離を縮めていきました。

9月、5年振りに研究室合宿が復活し、小国に行きました。2年生も5人が参加し、前期の演習の成果を発表しました。同じく9月、3年次開講の「古文書実習」でも5年振りに、宿泊研修が復活しました。水俣市教委の全面協力を得て、湯の児温泉に泊まりつつ、「深水家文書」の目録作成作業を行いました。この実習中、今年も4年生が、速く水俣までジュースやアイス等の差し入れを持って来てくれたことは忘れられません。3年生は、10月から、M1の院生諸君の指導の下、『実習報告書』作成作業に入っています。

11月、卒業論文の中間発表会が開かれました。10月から稲葉先生の指導を受けるべく、ケンブリッジ大学から本学に留学しているアンドリュー・フィッシャーさんも参加し、夜の打ち上げでも楽しく交流しました。同じく11月、3年生有志が、九州大学との合同ゼミに参加しました。今年は熊大側が福岡市に乗り込むということで、ボルテージも最高潮に達していました。年が明け、無事に関係者全員が卒論・修論を提出できることを祈っています。



▲研究室合宿の帰途に阿蘇神社に立ち寄った時の一コマ

■考古学

2024年度の学生は、2年生4名、3年生10名、4年生7名、大学院修士2年生2名(うち1名は韓国)、大学院博士3年生2名(中国、ラオス各1名)の総勢25名を数えます。本年度は、これまで熊大考古学研究室を牽引してこられた小畑弘己先生ご退任前の最後の一年となり、ご担当の授業でもこれまでの研究成果や分析方法を熱心に学生に伝えていただきました。また夏季には昨年同様、合宿形式の発掘調査実習を行いました。今年度からは熊大考古の伝統、南島考古を復活させるべく、奄美群島の徳之島で新たな発掘をはじめました。初年度にもかかわらずグスク時代に遡るであろう水田址を検出し、大きな学術的成果を得ました。同時に、2年生にとっては初の合宿となりましたが、炎天下での作業や一つ屋根の下で自炊しながら同じ釜の飯を食う生活を楽しんでいました。10月には2019年に退任された木下尚子先生の講演会を開催しました。コロナ禍により中止された最終講義にかわる講演でしたが、多くのOB・OGと現役の研究室構成員が顔を合わせるよい機会となりました。年度末には小畑先生ご退任関連の講義や記念行事も予定しており、学

内外との交流が多い充実した一年となっています。



▲徳之島伊仙町ミンツキ集落跡の発掘メンバー

■アジア史学

令和6(2024)年度のアジア史研究室の構成員は、2年生4人、3年生3人、4年生1人、大学院生1人でした。さらにここに中国からの研究生4人が加わりますので、ここ数年と比べると研究室の規模が大きく拡大することになりました。新2年生の4人は元気がよく、また互いに仲がよいこともあり、研究室の活気が一気に戻ったというのがこの一年間の印象です。さらに夏には2年生4人と3年生2人が山鹿の温泉宿での合宿に参加してくれたことで、昨年まで中断されていたアジア史の伝統が復活しました。互いに親睦を深めながら、難解な論文に挑んだことは、きっと今後の勉強に活かされることでしょう。

9月には、岡山大学から中国古代史を専攻されている土口史記先生をお招きし、集中講義を開催することができました。普段の講義では聞くことができない中国古代史の内容を、学生たちは懸命に学んでおりました。

今年度は安徽大学のサマープログラムはなおも開催されず、コロナ禍前に完全に戻ったとは言いがたいですが、少しずつ以前の研究室の雰囲気を取り戻しつつあるように思います。来年度はさらに進化したアジア史研究室の様子をご報告できるものと確信しております。



▲久々の合宿で読書会に励む学生たち

■西洋史学

今年度は、「良く学び、良く遊ぶ」西洋史研究室の本領発揮の1年でした。4月には、垣根の低い新メンバー8名(2年生7名、院生1名)を迎え、にぎやかなスタートを切りました(総勢22名)。研究室の今年1年を表す言葉は「食」です。中川順子先生担当の講義では、食文化からイギリス帝国を読み解くという刺激的な視点を学び、演習では帝国内を移動する女性黒人料理人の世界について考えました。2・3年合同ゼミでは、美食ガイドで有名なミシュランを取り上げ、タイメーカーであったミシュランが、なぜ、1920年代に美食ガイドを刊行することになったのかをチームごとに検討し、プ

レゼン・バトルを行いました。研究室イベント「グローバル・キッチン」では、「ミシュラン1つ星☆を目指せ」をスローガンに、西洋各国の料理に挑戦。優勝は、手作り和牛バーガーを作ったアメリカ料理班です！9月には、イタリア海外研修旅行が三瓶弘喜先生の引率で実施されました。ローマを合流地点に、班ごとにプランを練って、ヴェネチア、フィレンツェ、ナポリ、アマルフィを訪れました。歴史的景観・建造物に恵まれたイタリアの旅は感動の連続で、郷土色豊かなイタリア料理も堪能しました！12月には、九州西洋史学会若手部会で4年生3名が研究報告を行い、他を圧倒する熊大パワーを発揮してくれました。



▲古代ローマの遺跡をバックに(イタリア研修旅行)

■文化史学

2024年度は、新たに学部生8名が研究室に加わりました。大学院生1名、学部生24名、総勢25名です。

今年度は、2019年以来実に5年ぶりに夏合宿が復活しました。阿蘇の山と川を満喫しながら出会って間もない先輩後輩の仲を深めたほか、夏のバーベキューや秋の芋煮会といった親睦行事を度々開催し、アジア史や考古学など他研究室の先生方や学生たちと共に歴史学科全体を盛り上げました。そんななか、学生の話し合いで決まった今年の課題研究テーマは「記号」。日本の女子高生生のシンボルとなっている「セーラー服」、日韓両国のあいだに突き刺さる「慰安婦」問題、河鍋暁斎が描いた「髑髏図」など各自のテーマで研究し、年度末のレポートにまとめました。

新井先生の演習テーマはフランスの19世紀から20世紀初頭にかけての女性身体表象、鈴木先生の演習では福沢諭吉『日本婦人論』を精読しました。このほか9月の集中講義では京都大学の細見和之先生をお招きし、ホロコーストという悲劇を通して20世紀という時代の再考察をおこないました。思想家の論説を通して「女らしさ」が作られる過程を探るなかで、21世紀の今を生きる自分自身の「性」と「生」のあり方を見つめ直す一方、生き物として避けることができない「死」に対する洞察も深めた1年でした。



▲9月下旬、夏合宿で阿蘇に赴いた際のひとコマ

文学科

■日本語日本文学 伊瀬知 美央さん(2年)

日本語日本文学研究室は日本文学や日本語の疑問に対する自分の答えを探す研究室です。講義や演習では新たな気付きも多く、文学に内在する教訓や価値観に触れるたびに、社会を生きるうえで知恵が残されていることが体感でき、文学作品を読むことが一層楽しくなります。

8月には九州大学の川平敏文先生をお迎えし、『徒然草』の受容史について集中講義をしていただき、「つれづれ」の意味を中心に解釈の多様性について学びました。また、後期の日本語学のオノマトペを考察する演習では、普段何気なく使っている日本語に多くの不思議があることを感じています。

これからも文学の魅力を日々感じつつ、日本語や文学に関する疑問について、自分なりの答えを探し続けていきたいです。



▲日文学研究室内の研究風景

■中国語中国文学 奥野 天満さん(3年)

中国語中国文学研究室は中国の古典文学や現代政治、また中国語圏の文化について、中国に関する事を幅広く研究しています。本研究室には中国からの留学生が多く、彼らとの会話は非常に有意義で楽しいものです。この一年を振り返って、中国語の資格取得に向けた勉強や、留学を決心したこと、研究室での充実した時間がモチベーションとなりました。私の研究分野は中国の起業家に関するもので、まだ構想を練っている段階ではありますが、自分の興味がある分野を研究することは、私が想像していたよりもずっと面白いものだと感じています。早いもので学生生活も残りわずか一年となり、この貴重な時間を悔いなく過ごせるよう日々精進していきたいです。



▲ZOOMと対面を併用した卒論発表会

■英語英米文学 村上 遼さん(3年)

英語英米文学研究室では3名の先生方のご指導の下、英米文学を始めとする様々な分野に関して学んでいます。参考書などの長文問題とは異なり、作品の中に流れる生きた英語を体で感じ、深くその作品を理解することを目指しています。授業内でのグループ活動やディスカッションなども、時に英語で行われるので、読むだけでなく他の学生の意見を聞き、それを踏まえて自分の意見を話す、という様にこれまでの英語

学習では難しかったより実践的な英語力の定着を感じられ、所属学生一同日々お互いに切磋琢磨しています。世界史やメディアで耳にする『ロミオとジュリエット』などを始めとする有名作品も原文で味わい、当時の背景を調べてみることで、これまでとは違った新しい表情を見せてくれますよ。



▲履修ガイダンスでの集合写真

■独語独文学 石丸 琳子さん(2年)

独語独文学研究室は学生7人ととても少人数ですが、パウアー先生、益先生、名誉教授の荻野先生の手厚いサポートの下、日々学業に励んでいます。世界文学の一つであるカフカの『変身』を原文で読んで考察したり、ナチス時代のドイツ語の特徴を分析したりと、ドイツの時代背景から文学作品、さらには言語研究まで幅広く学習することができます。少人数だからこそ質問や意見交換などもしやすく、学生主体の講義が行われています。コロナ禍が落ち着いた今、新入生歓迎会や合宿も例年通り行われ、学年の垣根を越えて共に高め合えるような雰囲気も形成されています。また、先生方との距離も近く、疑問点は納得のいくまで話し合い解決することができます。魅力がたくさん詰まったドイツ語圏文化を心ゆくまで勉強していきたいです。



▲山鹿温泉での合宿兼卒論中間発表会

■仏語仏文学 松本 美宇さん(3年)

仏語仏文学研究室では、フランス語学や文学についてはもちろん、フランスの生活や政治、歴史など広い分野を深く学んでいます。計7名の学生が在籍しており、サガズ先生、濱田先生、畑先生の手厚いサポートのもと勉学に励んでいます。

授業では、フランスの演劇の映像を実際に見たり、フランス文学の作品の背景を学んだり、難しい内容の新聞を一文ずつ読み



▲五高記念館前で

解く、などしています。高校までには深く知る機会が少ないフランスについて深く学ぶことによって、自国や他国の文化や言語について比較することができるようになります。そこから物事を多角的に考察するようになり、フランス以外の学びが深められることにつながるのも、仏語仏文学を学ぶ醍醐味の一つであると感じています。

■比較文学 小川 宰さん(3年)

本研究室では越境文学や翻訳受容など、他の研究室とは異なる側面から文学の魅力を掘り下げる活動に日々取り組んでいます。たとえば演習科目では夏目漱石の文学を留学を切り口に分析したり、中国人作家の詩や小説に見られる日本留学の影響などを研究しました。また課題研究では純文学以外にもアニメや音楽といった幅広いジャンルの作品を比較文学の手法で分析しました。夏には東京大学の阿部賢一先生による集中講義「翻訳とメタファーから考える文学研究」があり、前期までに山東師範大学の王玲先生(「日本漢籍の調査」)、後期から台湾長栄大学の林憲宏先生(「芥川龍之介研究」)が客員研究員として滞在されました。刺激的な学習環境のなか、「お弁当の会」が毎週開催されており、交流の機会にも恵まれています。



▲五高記念館復元教室にて

■国際文化学 橋山 公紀さん(4年)

国際文化学は、様々な文化事象を対象に、その国の文化だけでなく日本の文化も捉え直すことができる学問です。卒論では、TSMC事象に関するメディア研究を行っています。卒論執筆を通じて、統計の知識や他の学問の知識を蓄えることができました。国際文化学では、対象を限定せず、学生が関心を持った文化事象について先生の指導を受け研究し、授業を通して、今後の人生に役立つ思考力や他者の尊重といった基礎的な能力を養うことができます。就職だけでなく、日常で仲間と集団で行動する時にもこのような能力を発揮し、充実した生活を送れると思います。大学生のうちに、異文化理解を深めてグローバル社会で活躍する準備をするだけでなく、人生をより豊かにする準備を一緒に始めてみませんか。



▲英語でディスカッション(国際文化学演習II)

コミュニケーション情報学科

■ 全体総括

コミュニケーション情報学科は、国際化・情報化が進む時代や社会の変化に機敏に応え、情報メディアの運用能力と英語による優れた国際コミュニケーション能力を有する人材の養成を図るという趣旨のもと平成17年度に設置されました。それから約20年もの間、600人の卒業生を輩出してきましたが、その歴史に幕が下ろされることになりました。

令和6年7月31日、熊本大学ホームページで発表されたように、熊本大学文学部は令和8年度から一学部一学科制に移行することになりました。また、令和8年度より新たに「共創学環」(仮称)が設置される予定です。このような改組に伴い、コミュニケーション情報学科は再編されます。まず、コミュニケーション情報学コースは、共創学環の基盤として発展的に組み込まれます。また、現代文化資源学コースは、一学科となる文学部内に留まり、教育や研究の幅を広げ深みを追求することになります。コミュニケーション情報学科としての入試は今年度をもって最後となり、令和7年度の新入生が学科最後の学生となります。

上記のような組織の変更は、現在学科に所属している学生に影響を及ぼしません。入学時に配布された『学生便覧』に掲載されている規定、科目などについては変更なく、最後の1名が卒業または退学するまで、学科の教育は維持されます。このことについてご不明な点がございましたら、学科の教務委員、学生支援委員、ゼミ指導教員などにお尋ねください。

■ 就職状況

今年度卒業予定の38名の就職内定率は86.8%、進学を含めた進路決定率は97.4%となっております(2024年12月末現在)。世界的なインフレやエネルギー価格の高騰など経済へのマイナス要素もありますが、国内・県内の就職状況が概ね堅調であることは数少ない安心材料です。2023年度以降はコロナ禍以前の状況に戻り、青田買いにより就職内定時期も前倒しになりつつあります。

本学科の卒業生は従来、情報通信系や金融の就職が多数でしたが、今年度はITソリューションやマーケティングを含めた企業コンサルへの就職も多くみられました。そのほか広告業界を含めた新聞などのマスコミへの就職も着実に続いています。また、比較的熊本県内や九州への就職が多い傾向から、TSMCを含めた半導体企業などの製造業の誘致の影響で電器・機械・材料関連の就職は今後増加する可能性があります。

■ コミュニケーション情報学コース

本年度のコミュニケーション情報学コース

(以下『本コース』と略)は、新たな出発に向けた「助走」とも言える段階に入りました。再来年度、本コースは文理融合型の「共創学環」(仮称)にアップグレードされます。来年度については、これまで通り本コースの学びは継続し、新1年生を迎えてこれまでと同様のカリキュラムを維持しながらも、本学科の強みに新たな魅力を加える試みをおこなっていく予定です。既に本年度からカリキュラムや授業の本格的な改善に着手しています。

本コースは、文系学部の弱みである「どのような社会人を送り出せるのか」という問題意識から検討が始まり、高いレベルの英語運用能力とメディア運用能力を身につけた人材の育成を目指し、2003年にコースを設置、05年には学科としてスタートしました。グローバルなコミュニケーションに不可欠な英語運用力として英検準1級・TOEFL575点・TOEIC850点という具体的な目標を定めること、「出口」として情報産業やメディア産業を想定したことも、当時の文学部のイメージからするとユニークだったと言えるでしょう。

しかしながら、開設から20年。ChatGPTに代表されるような生成AIが自然言語を流暢に扱えるようになってきているような現在の環境を考えると、会話やプレゼンテーションのスキル以上に、課題を正確に捉え、課題解決に向けたイノベティブなアイデアを生み出し、具体的なアクションを「設計」できるか、といった「プロジェクトを創り出す」力がより重要になってきています。そういった状況を踏まえ、本コースの学びは最適化されていきます。新聞・雑誌や動画などのメディアの制作・表現を学ぶ演習授業を、来年度以降は、より具体的なテーマに対して学生が自ら課題を設定し、メディアやイベントの制作を考えるといった内容にアップグレードする予定です。地域での多文化共生というテーマを取りあげ、民間企業や公共機関と連携し、メディアやイベントなどを活用して解決策を見出すことが目標です。多様なデータの分析などを含め分野横断型のアプローチを目指す共創学環に接続していく、本コースの新しい学びにご期待ください。

■ 現代文化資源学コース

本コースでは、23度末に第2期卒業生を送り出しました。24年度は新たに大学院生5名を加えたほか、学部生は、2年次16名、3年次16名、4年次14名と、これまでになく多い人数が在籍しています。教員の陣容については、23年度から池川佳宏准教授、伊藤弘准教授の2名が加わり、メディア論の分野の研究・教育がさらに増強されましたが、24年度末をもって言語学の児玉望教授が定年を迎えられ

テクノロジーが描く
オンライン学習と社会問題

山岸 碧さん(4年)

昨年の2月から約10カ月間、オーストラリアのシドニー工科大学に交換留学に行きました。その間、所属していた江川先生のゼミにはずっとオンラインで参加していました。

コロナウイルスの流行によって、大学入学直後はオンライン授業の受講を余儀なくされ、新入生歓迎会が開催されないなど機会損失は大きかった一方で、オンライン学習が普及したことで約8000km離れた2か国間でハイブリッドな学びが実現するという恩恵がありました。週に1回の頻度でゼミにオンライン参加することで、仲間とのつながりを保てたこと、研究作業を積みあげていったことで、留学終了後スムーズに卒業論文の作成に視点を切り替えることが出来たと感じています。

研究テーマは日本におけるオンライン上の外国人差別を始めとする排外主義の高まりです。派遣先大学で受講した授業のひとつ「digital literacy」では、オーストラリア社会の主流メディアから周縁化されたアボリジニの人々がオンライン上でどのように活動の場を開拓しているか、また多様なバックグラウンドを持つ人々が人種的・社会的・経済的理由でテクノロジーへのアクセスが制限されているという社会問題、加えて、デジタルテクノロジーを使って他国の領土を侵略するデジタル植民地主義などを学びました。

オンライン学習を利用しながら、デジタルテクノロジーの普及で生まれた社会の分断について学び、善かれ悪しかれ技術の進歩によって様々な変化を余儀なくされた社会を今生きているということを感じた1年間でした。

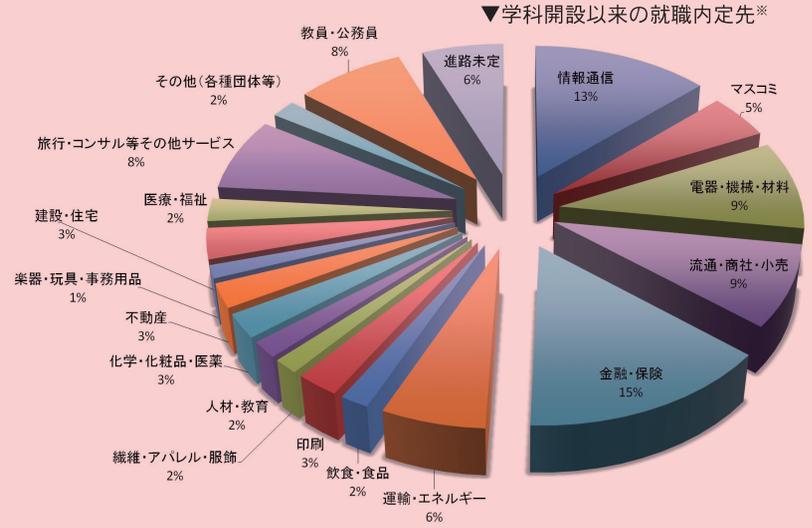


▲ダグラス・パークにてUTS(シドニー工科大学)のポーズ

ます。児玉先生は35年にわたり熊本大学文学部での研究・教育に貢献され、本コースの立ち上げにも携わっておられます。長い間ほんとうにお世話になりました。

本コースは「新たな文化価値の創造」をキーワードに創設されました。卒業論文のテーマは落語や流鏑馬といった伝統文化から、戦後のマンガ文化、映画・映像作品、ネット文化に関するものまで多岐にわたります。「現代文化」というのは良くも悪くも間口が広く、個々の学生の関心に即して自由度の高いテーマ設定が可能です。ただ、本当に自由になんでもやってよいと云われると、逆にどうしたらよいかわからなくなってしまうということもしばしば起こります。自分の本当にやりたいことは何だろうとあれこれ悩み回り道する経験は一見すると効率が悪いように思われますが、学問に王道なしと古くから云われるように、迂遠であっても着実な試行錯誤の積み重ねこそが結果的には一番の近道であろうと思います。

※コミュニケーション情報学コースのみの時代の2007年度卒業以降の実績。進路把握の難しい留学生を除いた就職者611名(本学大学院修了3名を含む)が対象。



2024年度の教務委員会について

文学部教務委員会 委員長 児玉 望



文学部教務委員会は、正副委員長と4名の学科選出委員から成り、教務担当の職員と密接に連携して教務全般の管理運営を行なっています。

学生は、大学で学ぶにあたり、授業を履修登録して受講し、試験等による評価を経て単位を修得し、進級して進学コースを選択します。コースでは、履修モデルごとに専門的な教育を受けて卒業論文を執筆し、学士となります。その節目ごとに学生自身が期限内に申請しなければならない手続きがあり、進級や卒業には定められた要件があります。また、休学・復学、退学、転学部・転学科等の身分異動の申請も出されます。

そうした申請や要件について審議することが教務委員会の業務になります。

その他、全学的な教務のあり方を審議する全学の教務委員会にも、教務委員長が文学部を代表して出席し、議論に加わります。

新型コロナウイルス感染症の流行が一服し、対面授業や対面での事務手続きを主体とするコロナ禍以前の大学に戻りつつありますが、この流行を機に全学的に整備された遠隔での授業や事務手続きの仕組みや規則を、今後の教務にどのように反映させるか、たとえば、在学での留学中に遠隔での卒論指導や卒論提出・卒論試験が認められる手続きをどうするかが、今年度の教務委員会では検討されています。

2024年度の学生支援委員会の活動について

文学部学生支援委員会 委員長 トビアス・パウアー



文学部学生支援委員会は、学生生活全般の支援を目的として、各学科からの委員4名と委員長により形成されています。

本年度の各学科の学生支援委員の活動は、4月の新入生ガイダンスでの大学生活に関する情報提供とアドバイスを始めました。初めての大学生活での様々な不安を解消してスムーズに馴染めるように、各学科で歓迎会を実施する等、学生同士や教員とのつながりを持てるよう意識して諸活動を行っています。

当委員会には、本学の就職支援課と連携して、学生の就職や進路を応援するという役割もあります。文学部では進路支援のための独自の

学部共通科目「キャリア支援」が開講されており、文学部の就職率は高い水準にあります。さらに好転できるよう、1・2年生の早い時期から必要な情報を提供することを目的に、民間企業の協力を得て「キャリアガイダンス」を実施しました。さらに、文系学部生のニーズに特化した講座「(はたらく)ことを考える」も実施しました。両イベントに参加した学生にはとても好評だったようです。

学生時代は、社会との関わりを意識しながら生活や学習の中で試行錯誤し、様々な知恵を身につけていく時期です。学生の自主性を尊重しながら、充実した人生への助走を応援するのが当委員会の役割だと考えています。

2024年度オープンキャンパス報告

2024年8月3日(土)に、文学部オープンキャンパスを実施しました。昨年度から対面形式での開催に戻り、今年度は、北は北海道から南は沖縄県まで、全国から1,000人以上の高校生に足を運んでいただきました。

高校生向けのイベントとしては、各学科の教員による「模擬授業」(2科目)と、在学生や教員に直接質問・相談ができる「研究室訪問」を行いました。特に後者は、各学生研究室で独自の企画を行うなど和やかな雰囲気でも、毎年好意的な評価をいただいています。

これらと並行して、保護者・引率者向け控室では、学部長と関係委

文学部広報・情報化推進委員会 委員長 茂木 俊伸

員会の委員長が質問にお答えする説明会を行いました。事前に準備した資料と座席が足りなくなりご迷惑をおかけしましたが、これも私たち文学部への期待の大きさと受け止めています。

8月の開催ということで熱中症対策に苦慮していますが、送風機の設置やオリジナルうちわの配布など、工夫を続けています。猛暑の中、在学生の皆さん、教職員の皆さんに多大なご協力をいただき、大きなトラブルもなく無事に終えることができました。来年度も文学部の魅力をお伝えできるよう、しっかりと準備を進めていきたいと考えています。

留学体験記

■文学科 古賀 伊織さん(4年)

私はドイツのザールブリュッケンにあるザールラント大学というところで、半年間の留学をしました。諸々の手続きや体調不良などに大変苦労しましたが、振り返ってみればとても良い経験ができたと思っています。

ドイツに着いてからの生活は、慣れない言葉に慣れない食生活、経験したことのない気候と、右も左もわからず不安を感じずにはられない日々でした。しかし月日が経つにつれ、次第に外国語で意思疎通ができるようになること、未知の味に一喜一憂すること、そして歴史を物語る街並みに思いを馳せることは、日本にはなかなか味わうことのできない、何事にも代えがたい体験となりました。何より言葉に関しては、私が言語学を研究していることもあり、勉強してきた表現も教科書だけでは知り得ない方言も、現地の生活の中で生きていることを実感できたことが大きな収穫でした。

大学で留学することの利点は、留学生用の寮や授業などで様々な国から来た学生たちと出会い、交流する機会が数多くあることです。様々な言語や文化を少しでも知ることで良い刺激になります。一步を踏み出す勇気を出し、是非とも一度海外での生活を、五感を使って味わってみてください。



▲ザールラント大学正門



▲街でのクリスマスマーケット

インターンシップに参加して

■コミュニケーション情報学科 宮元 美桂理さん(4年)



私は夏と冬を通じて、計22社のインターンシップに参加しました。特に調達や物流分野に強い関心があり、それらの業種を中心に経験を積みました。中でも、特に印象深かったAmazon Japanでのインターンシップについてご紹介します。

このプログラムでは、オペレーション総合職として、倉庫における従業員の安全性と働きやすい環境づくりに焦点を当てた2日間にわたるワークに取り組みました。具体的には、4人1組のチームに分かれ、職場アンケートのデータを分析し、課題を特定した上で改善戦略を立案するという内容でした。チームメンバーは非常に優秀で、仲間の鋭い発想力と論理的思考力に大いに刺激を受けながら、私自身も負けじと必死に取り組みました。特に印象的だったのは、Amazon独自のリーダーシップの考え方に基いてワークが進められた点です。他のプログラムでは得られない貴重な経験となりました。

インターンシップを通じて、様々な業界や職種について直接学ぶ機会を得ただけでなく、普段交流することのない地方や都市部の就活生との出会いを通じて、自分の視野を大きく広げることができました。このような貴重な機会を提供してくださった全ての方々に、心から感謝しています。

漱石・八雲教育研究センター活動報告

漱石・八雲教育研究センター長 新井 英永

漱石・八雲教育研究センターは、2017年12月に設置された文学部附属センターです。熊本大学の前身である第五高等学校ゆかりの夏目漱石と小泉八雲について、本学教員がセンター兼務教員として共同研究を行ない、文化行政機関等との連携により地域文化振興に貢献するとともに、人材育成に寄与することを目的としています。2020年には定期刊行雑誌として欧文雑誌 *Soseki and Hearn Studies* を創刊し、2024年春に同雑誌のVol.5を刊行しました。

本年度の主な活動としては、NPO 法人くまもと漱石文化振興会との共催で「漱石九日読書会：夏目漱石の熊本時代」を開催しました。本センターの坂元昌樹先生が10月6日(日)の第1回報告を、西楨偉先生が11月10日(日)の第2回報告を、それぞれ担当しました。

11月15日(金)には、熊本大学に寄贈され本センターが所蔵するウッディ・ベイツ・コレクション(アメリカ人コレクターによるラフカディオ・ハーン関係図書)の公開記念講演会を五高記念館講義室にて開催しました。寄贈者のナオミ・ハラダ・ウエストコット氏と豊田沖人氏をお迎えし、センターの濱田明先生のあいさつに続き、永尾悟先生が「ウッディ・ベイツ・コレクション：日米をつなぐハーンの絆」と題して講演しました。

また、12月7日(土)に日本比較文学会九州支部との共催でシンポジウム「越境するハーン：日本・中国・フランス」を開催しました。



▲公開記念講演会でウッディ・ベイツ・コレクションについて説明する永尾先生

永青文庫研究センター活動報告

永青文庫研究センター専任准教授 今村 直樹

当センターは、本年度も以下のような活動を精力的に展開した。

まず、研究活動では、公益財団法人永青文庫との共同調査で発見された新たな織田信長書状の存在を2024年9月に記者発表した。さらに、稲葉継陽センター長と後藤典子特別研究員が編集を担当し、新出書状を含む信長文書60通を詳細に解説した『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の六〇通』(勉誠社、2024年10月)を刊行した。研究紀要『永青文庫研究』第8号も2025年3月刊行予定である。基礎研究では、稲葉センター長を代表者とする科学研究費補助金(基盤研究(C))に基づくTOPPAN株式会社との共同研究の成果として、くずし字AI-OCRを活用した古文書の大規模調査のための独自手法が開発された。

社会貢献活動では、当センター設立15周年記念として、信長文書60通を展示した永青文庫秋季展「信長の手紙―珠玉の60通大公開―」(2024年10月5日～12月1日)が開催され、大きな反響を呼んだ。今村直樹専任教員と三澤純兼任教員が担当した第39回附属図書館貴重資料展「小楠に届いた手紙―横井小楠文書にみる幕末群像―」(2024年11月2日～11月4日)および第18回永青文庫セミナーも盛況であった。2025年3月8日には、東京大学史料編纂所と当センターとの共同研究の成果を発表する講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」が、熊本大学文学部本館で開催予定である。



2024年10月に刊行された『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の六〇通』

2024年度 熊本大学文学会活動報告

2024年度 文学会常任理事 井上 暁子



文学会は、文学部の教育と研究をさまざまな形で支える、学生と教員による互助組織です。コロナ禍で下火になっていた研修旅行、学生学術活動、学会開催といった活動も、今年度は活発に行われました。また、今年度から「大雨・地震等による激甚災害被災者への補助事業」が始まりました。その他の主な活動は以下のとおりです。

1. 文学部の教育・研究環境整備のための支援金

教育研究環境整備の経費として文学部に50万円寄付。

2. 就職活動に対する支援

各学科・講座で必要と判断された「就職情報誌」購入の補助。

3. 学会補助

今年度熊本大学文学部で開催された学会(日本独文学会、九州フランス文学会、日本比較文学会)に対する補助。

4. 研修旅行補助

「文学部の正規の授業として行われる調査・実習・ゼミ合宿」および「学科、コース、分野研究室で課外活動として行われる合宿等」を対象とする補助。

5. 進級記念品、新入生歓迎行事補助、オープンキャンパス補助

4年生に進級した学生会員に対する記念品(1人4,000円の図書券)。新入生1人あたり700円の補助。オープンキャンパス開催に際し、各履

修モデルへ6,000円補助。

6. 図書整備費

学生用図書充実のため、今年度は総合人間学科と歴史学科にそれぞれ15万円の補助。

7. 学生用コピー機の維持管理

8. 『文学部通信』に対する補助

『文学部通信』の発行費用、ならびに保護者への郵送費を負担。

9. 学生学術活動補助

「正規の授業として大学や文学部により予算措置が行われている活動」以外の、「大学での研究教育に基づいた学生の主催する他大学・他学部との共同学術交流活動」を対象とする補助。

これらの事業は、会員(学生と教員)の会費によってまかなわれ、文学部の教育研究活動に広く還元されるものです。未加入の皆さまにおかれましても、ぜひ加入をご検討くださいますよう、どうぞよろしくお願い致します。

文学部通信 第24号

2025年3月1日

発行：熊本大学文学部／熊本大学文学会
編集：熊本大学文学部 広報・情報推進委員会
茂木俊伸、富村憲貴、田中朋弘、小林晃、池川佳宏
ウェブサイト <https://www.let.kumamoto-u.ac.jp>

